

すべての穴はドーナツに通ず

「ドーナツの穴」に関するさまざまな謎について多彩な分野の研究者が論考を巡らせた「失われたドーナツの穴を求めて」が大津市のさいはて社から刊行された。京都市内で開かれた出版記念イベントでは、編著者ら3人が「ドーナツの穴はいつあったのか？」などの疑問について大まじめに、時にユーモアを交えて語り合った。

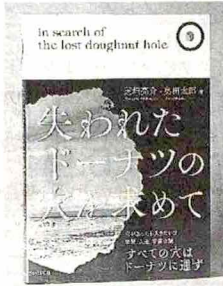
同書の刊行は南山大の芝垣亮

■京で出版イベント



ドーナツの穴の謎について語り合う芝垣さん(右)ら
—京都市中京区・丸善京都本店

介准教授(言語学)がふと「ドーナツか、ドーナツツか」と言葉の違いに疑問を抱き、その後ドーナツ店でドーナツの穴を巡る店員と客の奇妙なやりとりを遭遇したのがきっかけ。ネットで調べると膨大な関連情報が見つかり、大阪大の教員らが出版した先行研究もあったが、納得できない点も多く「もっと本気で探求する価値がある」と学内



で共同研究を企画。賛同した奥田太郎教授(哲学)と共に、理系、文系を問わず研究者仲間に参加を呼び掛けた。

「すべての穴はドーナツに通ず」を合言葉に、歴史学や経済学、コミュニケーション、数学など多様な視点で「穴」を分析した論文8本とコラム10本を収録。ドーナツの穴の起源を探ろうと大英博物館で史料を探したり、発見した1852年のレシ

いつあいた？ 何がある？ 研究者ら「謎」巡り真剣論議

ピを基に当時のドーナツを再現した様子も紹介した。「ドーナツの中心には穴があるのか、何もないのか」を哲学的に検証し、徹底的に議論した。

京都でのトークイベントには編者の芝垣さんと奥田さん、著者の1人で同大学准教授の佐藤啓介さんが参加。物質文化論が専門の佐藤さんは「穴と言っても、中心の軸を抜き取って作るちくわ、ひも状の素材の端と端をつなぐベークル、くりぬいて作るドーナツなど製法はいろいろ。穴を作る体の動きや道具も多様で、穴一つから世界の成り立ちがのぞける」と説明した。穴の定義を巡り「埋められるのが穴」「いや、外力を加えてできたものだ」などと3人の議論が熱を帯びる場面も。

同書は本の右上に直径8ミリの穴をあけたユニークなデザインで、さいはて社の大隅直人さんは「穴があいた本は、知る限り国内で約50年ぶりだが、必然だった。試行錯誤の末だったが、電子書籍ではできないこと」と本作りの魅力を語った。(道又隆弘)

※訂正 2段目 後ろから2行目 大英博物館 → 大英図書館
3段目 後ろから4行目 約50年ぶり → 約40年ぶり